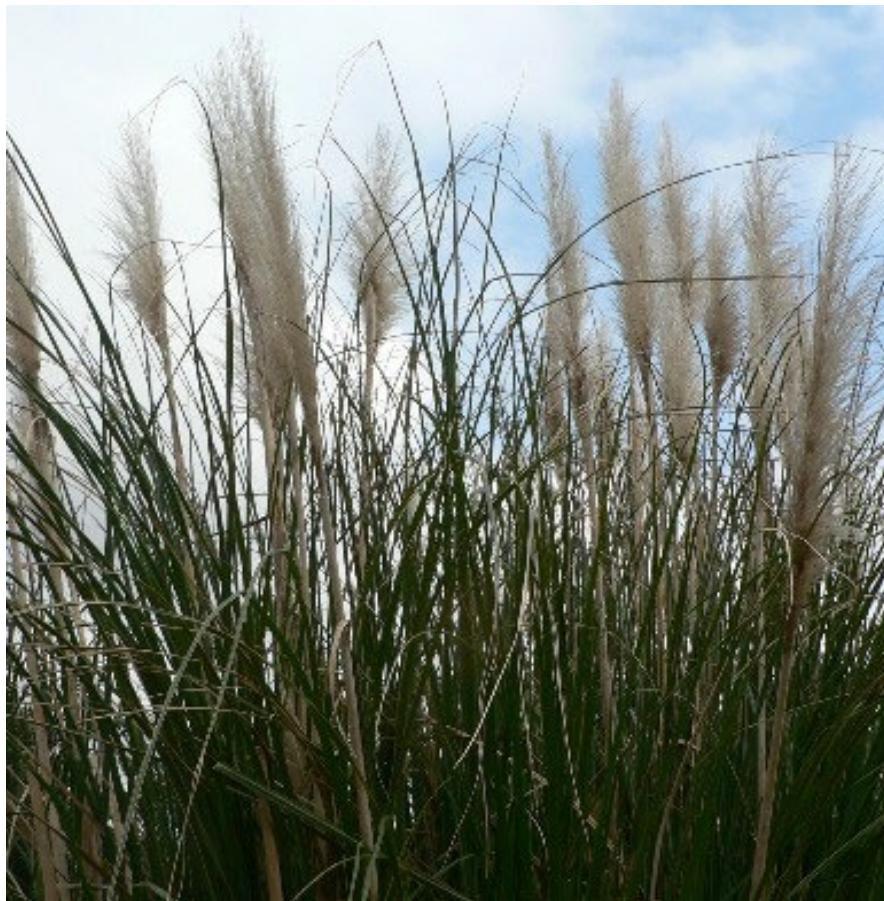


# 白金蔵

2月号



平成28年2月発行

第60号

三月十八日(金) 12:00 ～ 15:00 第三兼題・お水取り、鳥曇

四月十五日(金) 12:00 ～ 15:00 ア第三兼題・梨の花、春眠

五月二〇日(金) 12:00 ～ 15:00 ア第三兼題・初夏、麦飯

三月十八日分兼題(お水取り、鳥曇) 参考句

人はひとのぬくみの中にお水取り

闇に舞う火の粉の散華お水取り

お水取り待つ群衆に夜気迫る

水とりや氷の僧の沓の音

煤あびて我也籠人お水取り

沓の音水の音しぬ二月堂

水取や磴につきたる火屑みち

水取や僧形も見ず詣で去る

唄ひ出しきうな花束鳥ぐもり

煙所の海へ向く椅子鳥曇

觀音の山懷や鳥曇

鳥曇り地球は一枚の厚紙

アイロンは汽船のかたち鳥曇

少年の見遣るは少女鳥雲に

この道の先に原子炉鳥曇り

川崎奈美

西川寿賀子

阿形公枝

松尾芭蕉

長谷川櫂

大魯

皆吉爽雨

〃

前田典子

松家京子

香坂恵依

角谷昌子

中村草田男

池田澄子

飯田孝三

閉校の庭のはつらつ露の薹

毛繕ふ猫の肉球日脚伸ぶ

露の薹手賀沼は波ざざら

バレンタインデイ東京や春一番

バレンタインデイデパ地下は女子の熱いきれ

増田陽一

春大根の抱擁と断絶

白鳥は球根に似てユーラシア

手賀沼に雉まだ見えず露の薹

バレンタインデー町ぢゅうの猫落ちつかず

草を焼く火のみ明るき春の暮

光成高志

春の鳶ひとつ滑空伊良湖岬

娘にもらふバレンタインの義理ちよこつこ

立春や出版稿を電送す

餅焼くや膨れはたまた裏返る

蕗の薹の焼け焦げ口に放り込む

マユキユアの爪で差し出すバレンタインチヨコ

手の窪に愛づるひとつや蕗の薹

節分会待つ子かけっこ鬼ごっこ

シンガーに蛸干されゐて孕猫

雀より小振りの毬の蕗の薹

光  
みち

濡煎餅の袋を端に春炬燵

立春や花弁くずる砂糖菓子

したたりててのくぼぬらすふきのたう

杖帽子ほふりて庭に青き踏む

空も又萌黄ならずや蕗のたう

蕗のたう一と夜の雪を冠り合ひ

忍ぶ恋なつかしバレンタインの日

バレンタインデー嘘の恋ほんものへ  
戦争詠の茂吉いたまし蕗のたう

吉羽多美子

松村幸一

武者昭七

冬の旅机上プランのままに過ぎ  
こころざし衰へし日や置炬燵

初便り二月礼者と詫びのあり

バレンタインの日甘き香りも遠ざかり

春寒や余光の街を歩きけり

倉田紀子

雪椿ほの字の円し八一の書

浅野正美

バレンタインデー自分に褒美チョコ選び

蕗の薹思わぬところに二つ三つ

刻む手に春の香移る蕗の薹

内孫によく似た雛選びけり

子がもらうチョコ気になるバレンタインデー

青木啓泰

雑談も一気にどんどんで祓われる

南無妙と木魚の度に蝌蚪生まる

いぬふぐり売り物件で咲いてゐる

眠そうにまぶたのやうな蕗の薹

眉剃つてバレンタインの女かな

テーブルにコップ一つの蕗のたう

バレンタイン百面相を子に見せる

蹴飛ばして踏んづけてふきのたう

蕗のたう五つ貫つて二つあげ

会話弾むバレンタインの親子かな

田宮敦子

選句結果（数字は入選数 左添書きは添削句）

毛繕ふ猫の肉球日脚伸ぶ

バレンタインデー町ぢゆうの猫落ちつかず

杖帽子ほふりて庭に青き踏む

会話弾むバレンタインの親子かな

節分会待つ子かけつゝ鬼ごっこ

なむあみと木魚鳴る度蝌蚪生まる

南無妙と木魚の度に蝌蚪生まる

爪染めて差し出すバレンタインチョコ

マニユキュアの爪で差し出すバレンタインチョコ

眉剃つてバレンタインの女かな

手の窪に愛づるひとつや蕗の薹

蕗の薹思わぬところ二つ三つ

又二つ思はぬところ蕗の薹

蕗のたう一と夜の雪を冠り合ひ

立春や花弁くずる砂糖菓子

いぬふぐり売り物件で咲いてゐる

テーブルに一輪だけの蕗のたう

テーブルのコップに一つ蕗のたう

したたりててのくばぬらすふきのたう

沼風を背に探しをり蕗の薹

沼の風背に探しをり蕗の薹

孝三

陽一

紀子

敦子

みち

啓泰

みち

啓泰

正美

紀子

幸一

紀子

啓泰

敦子

紀子

多美子

バレンタインデー自分に褒美チョコ選び  
空も又萌黄ならずや路のたう  
立春や出版稿を電送す  
路の薹手賀沼は波さざら  
刻む手に春の香移る路の薹  
忍ぶ恋なつかしバレンタインの日  
初便り二月礼者と詫びのあり  
手賀沼に雉まだ見えず路の薹  
雑談も一気にどんどで祓われる  
内孫によく似た雛選びけり  
バレンタインデー嘘の恋ほんものへ  
バレンタインの日甘き香りも遠ざかり  
バレンタイン百面相を子に見せる  
餅焼くや膨れつはたと寝返りす  
餅焼くや膨れはたまた裏返る  
草を焼く火のみ明るき春の暮  
娘こにもらふバレンタインの義理ちよこつ  
バレンタイン我が青春に悔いのあり  
戦争詠の茂吉いたまし路のたう  
春寒や余光の街を歩きけり  
子がもらうチョコ気になるバレンタインデー正美  
幸一  
高志  
孝三  
正美  
幸一  
昭七  
陽一  
啓泰  
昭七  
幸一  
正美  
敦子  
昭七  
高志  
多美子  
幸一  
昭七  
陽一  
高志  
春大根の抱擁と断絶  
一句鑑賞

春大根は秋に播種して旬の冬を越し春になつて二月

三月に収穫する。私の畑でも一本種用に残してある。

しかし、掲句はそういう季節感というより、春大根の抱擁を詠つたものだ。昔、浅草の聖天さまに風呂吹大根をいただけるというので、列に並んだ覚えがある。

そこの聖天さまに大根が俵積みされて供えてあつた。またいたるところに二股大根を組み合わせた彫刻とか

提灯の絵などが見られた。良縁良福を求めて祈願すれば必ず成就する、夫婦仲が良くなると言われ、ご利益

を求める男女がお参りする寺である。掲句で一所懸命記憶を手繕り寄せたところ、確かに、春大根がまさに抱擁しているのだ。断絶は如何に。おそらく抱擁の後

には断絶があるからか。それだと離脱でいい。断絶はもつと強い言葉だ。切れて絶えることだから。子が沢山生れて一家が繁栄しても、いつかは断絶するというこの世の無常を詠つたのではないだろうか。

### 蕗の薹思わぬところに二つ三つ

正美

蕗は菊科の多年草で早春、いや年が明けたらすぐでも温かい日溜りでは萌黄色の花茎を出す。外側は鱗のような葉に包まれている。それで搭の意味の薹をあてるらしい。思わぬところに見つけた二つ三つの蕗の薹が目に見える。松茸を見つけた嬉しさに通ずる。いや早春の心持の嬉しさの方が強いでしょうね。

いぬふぐり売り物件で咲いてゐる

啓泰

啓泰さんはいぬふぐりが好きですね。先に「いぬふぐり世の中捨てたものではない」が震災句にありました。掲句は売り物件の宅地にいぬふぐりが咲いている現代風景である。跡継ぎがなく老人の家は家もろとも不動産屋に頼んで売り払うほかなく、田舎でよく見かけるところだ。過疎部落では売り物件はいい方で、捨てられてある家や宅地もある。果ては朽ちて土地だけになつて草茫茫々の土地の一隅にいぬふぐりが咲いている。聖天さまもいかんともしがたいのである。

### 節分会待つ子かけつこ鬼二つこ

みち

二月三日の節分の夕方、布佐の神社で豆撒きが行われるので餅を拾いに行く。夕方は子供の部、夜は大人の部と二回行われる。私たちのような老人は子供の部に加わる。年男年女を入れて神事があるのでその間神前の庭で子供たちはかけつこしたり鬼二つこをしたりわいわい騒いだりして待つ。真に賑やか。豆撒き最中は喊声となる。終ると喊声は止み静かな鎮守の森らしくなる。翌日は立春寒明けである。

### 蹴飛ばして踏んづけてふきのたう

敦子

幸一さんの開口一番「危ないところで踏みとどまつた句」とか。私は普通の人のあり様を見せているのを作者が目にしたその心持を詠つてるので、字足らず

であるが頂いた。風雅とか俳人とか言つておよそ大事に落の薹<sup>ハシモ</sup>ことをもて遊んでいるが、俺達には関係ないよと「蹴飛ばして踏んづけて」ゐるのである。意識しなくてもありうる所作である。それが実人生というものだ。

### バレンタインデイ東京や春一番

孝三

今年のバレンタインデーには低気圧が日本列島を西に移動したので、温かい強風が吹いて気象庁は春一番が吹いたと報じた。東京はそういうバレンタインデイになつたと素直な句。孝三さんはこういう句も作られるのだ。「東京や」のやがよく利いているので二重季語感はない。「降り頑る東京八景桜桃忌」(みち)のバレンタインデー版と思ひます。

### 一句鑑賞

#### 春の鳶ひとつ滑空伊良湖岬

高志

春の海を眼下に悠々と空を舞う一羽のとんび。「滑空」が春の空の広さと碧さ、とんびの悠然とした舞いようを見事にとらえた。

#### 立春や花弁くずる砂糖菓子

紀子

立春の寒気の緩みと砂糖菓子の花弁の崩れのイメージの重ね合わせにやわらかな女人の肌を想わせるなまめかしさ(エロチズム)が生れた。单なる写生句を

### 武者昭七

孝三

#### バレンタインデイデパ地下は女子の熱

前日からデパートの地下はチヨコを買い求める女性

群で超満員。ひしめきあう女性の熱氣であぶればなし。(行つたことないからわからないけれどおそらくそんなんだろうと推測するだけだけれど)この句にもそんな情景を感嘆の目で見るだけになつてしまつた男たちの羨望と揶揄がある。それにしても「女子」はなんと読むのがいいだろう。「じよし」か「おなご」か。後者だつたら「べつし」とか「さべつ」とか言われかねないのが「げんだいにっぽん」であろう。

越えて官能的で象徴的な意味合いの句となつた。にじみ出るのは立つたばかりの春の脆さ危さである。

#### バレンタインデー町ぢゅうの猫落ちつかず

陽一

古びた歳時記(山本健吉編昭和三十一年刊)にはもちろん載つていな。広辞苑第六版には「一九五八年ころから流行つた」とある。いまは義理チヨコなどといふのも出廻つて老若男女日本全国を巻き込んでの狂乱状態だ。陽一さんの句はそんな世相を横目で眺めてからかつているのだ。猫まで落ち着かぬとはなんとも愉快ではないか。人間さまもペットさまも一視同仁、差別なき時代の到来である。

## ハンガードに蛸干されぬて孕み猫

みち

正月に伊豆を回った。軒先にサンマの丸干しが簾の  
ように吊るされているのが目についた。縁側には猫が  
寝そべっていた。そんな平和な漁村の風景が思い出さ  
れて楽しい。蛸とハンガードのとつびな取り合せが愉快。

## 一句鑑賞

松村幸一

## なむあみと木魚鳴る度蛸蚪生る

啓泰

木魚が鳴るたび蛸蚪が生まれるなんて、笑い出して  
しまいます。でもあの木魚のリズミカルな波動は、障  
子の外の古池の蛸蚪の紐をたしかに揺さぶりそうです。  
木魚に感応している蛸蚪を想像するのも愉快ですがそ  
の上ニコリともせず木魚を叩きつづけるお坊さんの顔  
も大写しになつて、滑稽さを増幅させる。こういう發  
想は真面目な吟行俳句からは中々得難く、その背景に  
は現代川柳に深くかかわつてこられた経験の豊富な蓄  
積が生きていましょう。ちなみに「なむあみ」よりは  
「南無妙」では如何と提案されたのは陽一さん。「鳴る  
度」を「のたびに」では如何と提案したのは僕。とも  
あれ木魚と蛸蚪という時間と空間を一つに結んで、折  
からの人事と自然の春期発動の機微をとらえ得た秀抜  
果敢な一句ではないでしょうか。

## バレンタインデー町ぢゅうの猫落ちつかず

陽一

これ又笑い出さずにはいられぬ一句ですが、どこか  
に諷刺のサビが利いていて、軽佻ではない。それは「町  
かどの」ではなく「町なかの」でもなく、「町ぢゅう」  
の猫を総動員させた一点にかかわりましょう。晴れと  
雲とが、眞面目と遊びとが、実と虚とがチョコレート  
を媒介にして人間世界に往々交うバレンタインの日。  
それなら私だって折からの恋の季節であれば尚更のこ  
と黙つて見過ごせないよと、一句の中で「町ぢゅう」  
の猫族がぞめき立つています。そしてこの日ばかりは  
猫という猫が人間の顔を扮装をして仮に人間社会に紛  
れこんだとしても不思議はないゾ、と説得させる力あ  
る一句でもあります。そう思われるのは萩原朔太郎の、  
これは逆に人間が猫族に豹変する「猫町」のイメージ  
の誘いかけによるのかもしませんが。もう一句、同  
じ作者の「白鳥は球根に似てユーラシア」には驚き入  
りました。ユーラシアなんて、ぼくの貧弱な俳句言語  
圏からは探し出ししようもない奇想天外なフレーズ。で  
もこの句の発生母胎地がもしユーラシアならぬ手賀沼  
あたりの小景からだとしたら、尚更の想像力の卓抜さ  
に拍手を送らずにいられません。

## 二二こうざし衰えし日や置炬燵

昭七

「二二こうざし」といつても生き死にを託す態の悲壯

な大志ではなく、もっと卑近で日常的な、あれを遂げたいこれも成したいという程度の「強い夢」ととりたいです。そういう日常的な次元の志を次々と追つては成し遂げたり遂げられなかつたりの性懲りのない繰り返しが、僕らの人生のような気がします。作者もきっと「こころざし」を少々仰山と百も知りつつ、あえて冒頭に置かれたのでしよう。だが、決して大きくなないどんなケチな志つて、「こころざし」は「こころざし」。それがどうも危い、挫折しそうだと気分の萎える日もある。この時節炬燵ならぬ置炬燵というちんまりとした舞台道具が、少々ばかりほろにがい俳諧味を漂わせながらも「こころざし衰えし」人と心を、そつと抱えてくれるのではあるまいか。

## ハガキ句 60 報管見

### わが影のだいだらぼつち初日の出

ひろし

初日をうけ、今し莊嚴する富士の威に打たれ、だいだらぼつちの如きわが影に驚く。富士山に向かい、その裾野に立つて初日の御来光の一瞬を迎えたのである。だいだらぼつちは、（民俗の伝承については、詳らかにしないが）一晩で富士山や琵琶湖を造つたという伝説の巨人。（『日本語大辞典』講談社）。天地創造の昔に思いを馳せて、いまさら新年の淑気に身を染め、いのちを

## 飯田孝三

### 草囁んであるが兎の愉悦かな

虎童子

えも言われぬ洒脱な詠みつ。ぶりだ。さらさらと口を衝き、「愉悦」かな」と収めて座る。「囁んで」が咀嚼の一々を目見せ、更々、調べを彈ませる。愉悦は、心から樂しみよろこぶこと。小生など、つい、草を囁む「兎」に自分を重ねてしまう。今年は卯年。それに因んだ打坐の句だが、それだけではないだろう。純白の兎にまつわる、東西の説話、伝承を思えば、句の世界が膨らむ。作者は、ほほえんで知らん顔、読み

寿ぐ。思わず、小学の昔が蘇る、教室のあります。先生の厳かな口ぶり、悪戯鬼どもの神妙な顔つき、さては、齊唱のひびきまでが。「み民われ生きけるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらくおもへば」（万葉集（六））。（小生、作者と同じく、昭和一桁生れです。）

### 遠き日の埴輪しづかに年流る

美清流

遙かに埴輪の昔をふり返り、重ね來た人の行き來の日々、世の移りを思う。而して、歳月は流れる。喜寿、年頭の所感だろうか。深く、重い句である。「しづかに」が眼目。ふつと、刻々、自適のひびきを感じる。

### 富士山の雪が光れり真正面

圓子

「真正面」が目玉、句のいのちである。中七「う光れり」の切れに、淑氣た走る雪の輝きをまと見る。贅言無用。新年の句。

手己がじしに夢を託す。

## 太鼓橋二つ渡りて初詣

敏子

太鼓橋「二二つ」がめでたい。また、調べがいい。Ta iKoBaSiFuTaTuWaTaRiTTeHaTuMoOdE。a 音、i 音の繰り返し、加えて、ハ行音「ふタツ～ハツ～」の踏韻が明るく、軽やかで快。淑氣満ちる正月の句である。今年もきっとよいことがある。初詣では何を祈ったのだろう。「俳句はめでたさの文学」と言つたのは、確か森澄雄だつたか。

## 田作の粘着力を愉めり

高志

「粘着力」が面白。含蓄あり面白い。田作、別名(まめを噛んでいるのだ)。ふむ、なかなかの歯応えだ、味わいがある。「愉めり」の余裕がこころ憎い。“まだまだ、若い者には負けやしない。いやいや、まだ若いぞ”然り、俳句ばかりか、なべてこれからが本番である。快哉。

右、「ハガキ句(60報)」所掲から、とりわけ共感の句について、ハガキ掲載の順に小見を付しました。

### 〈俳句通信〉

お忙しくお過(う)ぎの(う)ようす、たいへんですね。齊藤嘉久先生には、以前、貴兄を通じ袖判句集『ドン・キホーテの夢』を頂戴しました。読後感想の小文をお送りしたところ、お札の葉書をいただきました。遅れ

ばせ、(ご)冥福をお祈りいたします。

## 菅野孝夫さんの『句と評論』、喜んでいただけて何

よりです。掲載の諸句はともかく、評論は逸品です。

『愚痴の相』の抽出は、気にかけられることはあります。暇を見いみい、(ご)夫妻でお読みください。氏の俳句はよく言えば軽妙、悪くは、軽佻。ときには多弁。もう少々、熟成させると、奥行きが加わる気がします。尤も、収録は初期の句ばかりのようですが。ともあれ、処女句集というのには好感します。〈駄句近作〉

## 二月の空が壊れるスカイツリー

(平23・02・05)

河野裕子逝きて半年春の月

ハガキ句 60報 (11・1・22)

わが影のだいだらぼつち初日の出

大年の海双子座流星群

蒼穹を舞ひたる羽の淑氣かな

光陰のゆるやかに過ぐ親子草

初鏡時よ止まれと願ひけり

脱兎にあらずわが喜寿の明けの春

尾白鷺翔つ草原の初日の出

遠き日の埴輪しづかに年流る

富士山の雪が光れり真正面

スカイツリーの丈はあらかた去年今年

孝三

圓子

美清流

三郎

華空子

妙子

たか子

白木

三穂

ひろし

孝三

太鼓橋

敏子

ひしくいを土手から見ている初日の出  
草噛んでゐるが兎の愉悦かな  
太鼓橋二つ渡りて初詣

田作の粘着力を愉しめり

高志 敏子 虎童子 啓泰

お便り広場（到着順、敬称略）

あけましてお目出度うございます。今年もまたよろしくお願ひ申し上げます。良い年にしたいですね。十四日戸田構造のOB八人と会食みんな元気でした。月一回他社の構造OBの会一人増え五人となりました。なにもかも教へられることばかりです。皆様の益々の御活躍を祈ります。只々も御身体を大切にして下さい。

（1・24 小山陽也）

一月二十六日白金葭一月号拝受致しました。何回も繰返し拝読しました。何かお偉い方ばかりの会で私ごとき凡人の入る余地もないのかと感じます。年が明けてもう一月も終わりに近くなり。あと一週間もすれば

立春となります。先日からの寒波の襲来で非常に厳しい寒さが続いています。雪になれない当地方では二十五日朝の雪にはびっくりしました。スリップ事故や小さな坂道が登れず往生しているのが何台もありました（家の上の県道松永府中線）。毎年正月には娘や孫ひ孫

達が墓参りと仏参りに来ます。五人いる孫も皆結婚して自立しました。昨年秋には最後の孫望美がハワイで結婚式をあげました。広島西区へ住んでいます。娘や孫が皆夫婦で来てくれるとは嬉しかつたです。自分が生きてる間だけだろうがそれでいいと思つて。孫も皆それぞれに実家を出て別々に暮しています。

親のあとを継ぐといった心はないように感じます。まあそれはそれでいいだろう。国の教育から変えないと治らないだろう。大きな話になつた？正月に撮つた写真を同封します。簡単な説明をつけています。見てください。一人暮しで今年で十三年になります。娘や孫達がまあそれなりに暮しているので妻は早く亡くなつたが私は幸せであつたと思つて。高志敏子さんそれがなりに高齢になります。あまり無理せずに自分のペースを忘れずにゆっくりと暮してください。以上返礼まで 高志敏子さんへ 健三より（1・26）

寒風に吹かれながらもウオーキング  
雪の中水仙咲いて春を見る

雪の中まこと名に負ふ雪中花

（家ありてそして水仙畠かな）小林一茶などの句があります。

水仙の句は難しいです。水仙やと言つといて、下に七五と何か

別なものを書いて知らんふりをするのがいいみたいです。)

寒中お見舞い申し上げます。先日の雪かきの下積み  
は氷板と化しところよりまだ残つております。日本の  
七十二候の中、大寒も次候となりました。日本の七十  
二候を楽しむ一旧暦のある暮らしーによれば「なるほ  
ど」と云うことでしょうか。

大寒、次候 水沢腹あづく堅し（水沢腹堅ふくげん）

新暦では 1／25～1／29 ごろ沢の水が厚く張りつめるところ。

候のことば

春隣はるとなり

旬の魚介 わかさぎ（公魚）

旬の野菜 みずな（水菜）京都では水と土だけで育てたので、みずな。

旬の野鳥 じょうびたき 鳴声が火打石の音のようだ

から「火焚き」黄びたき。尉鶴。

旬の草花 福寿草 因みに、アイヌ語ではクナウノン。

大寒、初候 款冬華さく 新暦 1／20～1／24 ごろ

ふきのとうはなざく 薙の花が咲きはじめる頃

大寒、末候 鶏始めて乳す 鶏が卵を産みはじめる頃

にわとりはじめてゆうす

新暦 1／30～2／3

かつて鶏の産卵期は春から夏にかけてでした

僭越ながら（歳旦吟）私好みを記します。  
堂に満つる児等の顔四方拝 孝三

陽一

年越して薊の絮は地に沈む

窓開けて遠初富士に拝手の礼 高志

みち

梅檀の一本倒す初仕事

元日の夕映え町を包みけり 多美子

紀子

病室に白湯飲む四温日和かな 幸一

泰

初芝居あの役者もし居たならば 寒風や海遠ざかる新幹線 昭七

獅子の口カチカチカチと頭食む 正美

初日の出昇り切りたる寒さかな 啓泰

一月は小正月以降ボヤくと過ごし失つた日をムダに過ごした悔いばかり残つています。人日はお義理で国

立劇場へ日本舞踊鑑賞、八日東京クラブ句会、友人と行くはずの初詣は相手のインフルエンザで行かず、十一日お鏡開きでお汁粉を作り四五の方に供す、十五日

小正月で小豆粥、仏壇の位牌と共に祝う（何故か七草粥はない家です）そうそう二月は隣家のような愛宕神社へお初穂料持参、ローソクを上げて参拝、神社総代さんから菊正宗一本お神酒、タオル一本頂きました。小さなお宮ながら毎年参拝が増えていきますよ。チヨツト興味を引かれた\*べーべー封入しました。本年もよろしくご指導下さいませ。

光成様（1／27 璃子） ポリスが来て詐欺にからぬよう注意あり、名前を聞かれ、へん、ツクリ、ナベブタ等言つても解らず閉口でした。偏、旁、鍋蓋（卦算冠の俗称）・・高志記ことばの食感（中村明）とて東京方言&田園的な「林」奥深い「森」のエッセイ。毎年異なる日に行われる主な行事の今後十年間の日にち（因みに今年の土用の丑の日は七月三十日、名月は九月十五日）

一月二十九日のお便り（切手スタンプは1／31）を頂いてからお返事もせぬ中にもう節分も立春も過ぎてしましました。 風邪も引かず元気と云いますか、どうか毎日大したことないで日が過ぎます。昔と違つてゴミ捨ても分別とか大変でダンボールやら新聞古紙など市の定めに従つてするのも一と仕事、自分で墓穴を掘つたためのおつきあいで、品物のやりとり手紙の往復（主として私よりの往のみ）一時間くらい平気な人達からの何度も聞いたか解らない長電話のお相手、もつとする事が沢山あるのにツンケンもできず、やさしくお話を聞きながら心中イラク、時間の使い方の下手さに我ながらうんざりしております。生きる為の食物も買いに出かけなければならず、確定申告はしなければならず、きさらぎなんて耳に快い言葉はよそごとの如く、二月は寒く多忙で生きすぎは面倒死にたい安倍さんもお彘びではなんて思いますが。光成様は句に歌仙

（1／27 璃子） ポリスが来て詐欺にからぬよう注意あり、名前を聞かれ、へん、ツクリ、ナベブタ等言つても解らず閉口でした。偏、旁、鍋蓋（卦算冠の俗称）・・高志記

ことばの食感（中村明）とて東京方言&田園的な「林」奥深い「森」のエッセイ。毎年異なる日に行われる主な行事の今後十年間の日にち（因みに今年の土用の丑の日は七月三十日、名月は九月十五日）

に情熱を燃やされみちさんと二人三脚生き甲斐のある人生を進んでいらっしゃることお見事です。

白金葭五周年記念合同句集楽しみでございます。みちさんからごていねいなお便りやら美しい絵はがき切手沢山頂きました。お心づかいありがたく恐縮しております。インフルエンザ流行とかお気をつけ下さいませ。一月八日 光成高志さま

長屋璃子

ごていねいなお便りありがとうございました。地震があつたり北朝鮮の変なタマが発射されたり嬉しくないことばかりですね。頂いた美しい絵ハガキの「西王母」は何十年も前にその名と簡咲きのやさしさが気に入り苗木を植えたのが庭にあり、ことさら嬉しく頂戴いたします。切手も沢山ありがとうございます。古い切手を沢山持つておりますが、五十円などは大きすぎる記念切手でハガキに不向きです。お役人は考えなしに芸術性さえあればいいと思って作ったのかも知れません。「梅の花」で頂いたギンナン、最近やつと頂きました。仙人ぽい味で好きです。インフルエンザにご注意を、まさかジカ熱にお気をつけてとは申しませんが。みちさま 二月八日 璃子

（以上の手紙が歌舞伎の霸王の切絵に挿まれてありました。）

雑用多く遅くなつて申し訳ありません。会費十二同封致します。古代は別便です。五月から少し駄句をつ

くります。二月六日は初午でした。床の間の掛軸に  
「紅梅の紅の通へる幹ならん 虚子」

この字が読めませんでした。宮司さんが来宅して  
すぐ読みました。流石ですね。なんとか元気でいます。  
益々のご活躍を祈ります。だんだん暖かくなりました。  
香取神社は19・20日が梅祭です。くれぐれも御身体を  
大切にして下さい。

(2・16 小山陽也)

迂闊にも検査日が第三金曜に当たるとは気が付きま  
せんでした。甚だ残念ですが欠席します。別添の出句  
をよろしくお願い申し上げます。ご盛会を祈り上げま  
す。

(平成28・2・16 飯田孝三)

春らしい日があつた反動で心浮かぬ日が続いており  
ます。寒さの中にも芽吹きが始まり、今が剪り時のも  
のがあつても、中々手につかず、そんなことも生きて  
いる人間のストレスの一つかも知れません。一度やめ  
た湯たんぽを又入れて寝ていますが、三階に独り寝に  
行く寒さかな(漱石)ロンドンの下宿の三階の寒さが  
解るよう思います。今迄つけていた暖房器具全部、  
電源やガス栓を消して俄に冷えた部屋、寒いものです。  
バレンタイン狂想曲終ればすぐ雛まつり、戦災で焼け  
て何もかも無くなつたのに長い七十年の間に色々お人  
形も集まりおひな様と云えるものもあれば出して上げ  
ない訳にも行かず出し入れ一仕事なのに続けています

ので、ソロくと思つております。春寒に加え、花粉が  
飛びはじめた由、お身おいとい下さいませ。

二月十六日 長屋璃子

受贈誌 (H 28年2月号)

寒四郎千振に口歪ませて (彩127)

平野ひろし

北ならい行方不明者放送中(リ)

リ

羅漢山観音山も冴返る (リ)

リ

一と葉なき枝に噴き出て花蘇枋(リ)

リ

ひよつとの顔して残る木瓜一つ(リ)

リ

冬薔薇の赤き一輪捨屋敷 (リ)

リ

ひよんの笛吹けば汽笛の音発す(リ)

河端不三子

縄文の火色遺跡の烏瓜 (彩125 古平隆評)

平野ひろし

癒えてしまひ啜る心天 (飛行雲77号)

駿河岳水

全山の冬紅葉して神戸かのと岩(あすか二月号)

山尾かづひろ

武藏野は冬芽抱く木木虔めり(かづひる吟行ノート H28 1・26)

璃子

峠を抜け橋をくぐりて春の水 (東京クラブ2月)

理佳江

海に出て暫し和まぬ春の川(リ)

文男

道野辺のおほ犬ふぐり空の色 (リ)

晴夫

なりはひは仕立屋と云ひ針祭る(リ)

璃子

万世遊

## 一だま

(彩127号ひろし抽)

### 二の酉や枡に金俵俵積み

(山尾かづひろ吟行ノート 1・26)

探梅やバスの終点まで来たる

蠟梅が真つ黄に咲いて曇空

初キネマ女先生子と泣ける

楠はもつこり雪かぶるかな

## 俳窓評論纂

\*孝三さんに赤崎ゆういち氏の句の載った「海程」のコピーを頂いた。以前に比島沖の離島での句を紹介したことのある誼である。氏の平成26年四十九回海程新人賞になつた20句、それに今年一月号の二十句などのコピーであつた。私の目を引いたのは、下段の叙述文の「ノーベル賞と枯尾花」である。金子兜太先生が今年のノーベル文学賞に選ばれなかつたことが残念、宇多喜代子さんの海程の句は「余りにも言葉が豊富厚すぎ、平明さ（軽み）に欠ける」といわれたことが書かれ、最後に吟行地の風布みかん園と尾花寺の風景に触れておられる。その最後の文章が多少写生文になつていてよかつた。最初のノーベル賞云々は的外れ、宇田喜代子さんの指摘は尤もと思われた。芭蕉の莊子傾

倒の精神に触れられたら、とてもこんな文章は書けないと思つた。率直な感想です。

高志

みち 高志 孝三 陽也

台風一過鳶の輪空に戻りけり

をいただきます。

\*木戸敦子さんから「喜怒哀樂」読み人応援マガジン（詩歌俳柳壇ニユース）2・3 Vol 84が送られてきた。この冊子は本誌と同じ16頁だが、A4の4段組なので分量は四倍分に相当する。中味を紹介する前に本誌もこういう冊子に更衣したいので、彼女からいいアドバイスがえられるものと勝手に思つてゐる。文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し㈱ミューズ・コー・ボレーシヨンが隔月発行している情報誌とある。スタッフは女性ばかり写真付きで紹介されてるので安心して頼める。毎月写真が変わらるらしい。少し文芸を楽しみ過ぎないかと思うが、これで現代的かもしれない。我が誌は文芸を好み信じ楽しむの好信楽と順序があるのだが、これも好き好きでしよう。菜根譚を表紙に句会の取材紹介俳句の投稿作品百以上、短歌三十川柳三十写俳四十が主な紙面です。紀子さんの故郷の新潟の文化の記憶館という露谷虹児や土田麦僊北一輝山本悌一郎の紹介記事などがある。とにかくよく構成された気楽でまた真面目で細かいところに気の置いた面白い冊子なので付き合つてみようと思ひます。

55 「貝おほひ」捧げし社時雨けり（東京の田野倉さん）

・・・この人芭蕉のことをよくご存知の方とお見受けしました。芭蕉忌は時雨忌ともいいますね。

195 この基礎の杭安全か不安なり（福岡の濱田さん）  
・・・観覧車の写真を見てのフォトトイック。こんな句が作られる世になつちゃつた。嘆かわしいというより、よくここまで心配してくれてありがとうございます。

### 我孫子日記

1/15	例会
1/30	ビックサイト
2/3	節分
*	
2/5～2/7	
*2	長兄葬儀
2/11～2/13	伊良湖岬・篠島
*3	
2/19	例会

- \* 寒明や天水桶に水溢れ  
\* 豆撒きに来て餅ばかり拾ひをり  
\*2 春蘭や一人の熟女よく笑ふ  
もはや帰京春のホームに送られて  
\*3 烏ひとつ滑空して来伊良湖岬  
春潮の伊良湖灯台一廻り  
黒鯛 一尾背鰓を宙に出し泳ぐ  
蛸は頭をいつも寝かせて泳ぐもの  
海鼠なまこ重なりおうて動かざる  
ハンガーに蛸引つぱられ干されあり

高志 みち

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

篠島の別れ海鶴に見送られ  
渥美半島私の好きなキヤベツ畑  
春なれや大きい風車の見ゆる宿  
山頭火来し篠島の白子丼  
黒眼張める島の市場の水槽裡  
囚はれて蛸は網目に手足出す  
蛸の目と我的眼と見つめ合ふ  
ハンガーに蛸干す下をやつれ猫  
これ以上積めぬキヤベツの軽トラック  
雪の富士まことうるはし神々し

高志 みち 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

白金霞二月号（第60号）平成28年二月発行  
編集・発行人 光成高志・電話（0417-871-068）  
発行所 270・1119 我孫子市南新木2-14-17  
表紙の題字・加納綾女。写真：二月23日の白金霞

### 編集後記

今日は璃子さんから季感あふれるお便りを沢山いた  
だきました。璃子さんの生活ぶり、お心内が手に取る

ようにもわかりましてどんどん読み進められます。これも文芸の力でしよう。我らの青春は手紙のやりとりを文通と言つて心の交換をしていました。その思いを今に見るようで楽しいです。どうかどんどん書いて送つて下さいませ。自分の書いた文章が帰ってきて読める楽しみもあります。五周年記念号の出版稿は今月で出版社に渡りました。後は初校校正がありますが、木戸敦子さんの見せ場になります。白金葭は相変わらず淡々と進みます。